
第三章 「女を愛する女たち」をめぐる表現活動

沢部ひとみ（一九五二年、ノンフィクションライター）

リブセンに行くまで

一九七一年、早稲田大学に入った翌年「川口君虐殺事件」というのが起きたんです。川口君という中核シンパの子が革マルに殺されて、東大の構内に捨てられるという事件が、一九七二年十一月八日に起きた。ちょうど連合赤軍の浅間山荘事件のあった年の秋だから、これも「内ゲバ」事件として片付けられてしまいがちだけど、こちらから見ると、セクトの支配的な空気に風穴をあけたような事件だった。そのころ早稲田は革マルに自治会を牛耳られていて、ちよつとでも連中に逆らうようなことを口にする、教を頼んで押さえ込みに来た。それで、学内のあっちこっちで革マルに対する抗議集会がもたれるようになって、もう授業どころじゃない日々が続くんですよ。そんななかで、私も少しずつ運動に入っていくんです。

学生運動といつてもたいしたことはないんだけど、自主講座をやったり、ゲリラ活動みたいなことをやったりした。自主講座では自分たちの思想的な支柱になるような知識人を呼んできて、その人たちに講演してもらおうということをやりました。

それから、川口君の死を悼んで、ちよつとしたパフォーマンスもやった。川口君の死を悼む詩

を書いた小さなしおりを作って、全身を覆う黒い衣装を作って着て、風鈴を持って記念会堂のところに三人で現れて、一般学生にそのしおりを無言で配っていくというパフォーマンス。あとは、「うんこ軍団」という一四、五人のチームを作って、すごく綿密なゲリラ作戦をやった。「うんこ軍団、蜂起せよ！ 革マルなんか糞食らえ！」がスローガン。ほんとにうんこ爆弾を作って革マルに投げつけちゃった(笑)。そんなことをして、革マルに反旗を翻していたわけ。でも、そう思ううちに面が割れちゃって、おっかなくて学校に行けなくなった。それがきっかけで、リブセン(リブ新宿センター)に通うようになった。私が初めてリブセンに行ったのは、一九七四年。この年には週に二回ぐらい通っています。

リブセンへ

リブセンに行ったのは、ジェンダーの問題があったと思う。「若草の会」の鈴木道子さん^二は、仲間を見つげるために大人のおもちや屋に行ったというけれど、私にはそういう発想はなかった。その頃はまだ「セクシュアリティ」という言葉はなかったけど、自分の問題は「リブ新宿センター」のようなどころのほうに近い」と感じていた。大学に入った年に軌道修正するために男の子ともつき合ってみて、田中美津さんの『いのちの女たちへ とり乱しウーマンリブ論』に共感していた。私は、自分が女らしくないというか、女らしさの規範を守って生きられない、というのを強く感じていて、それがものすごく苦しかったから。セクシュアリティの問題もあるんだけど、それと同じくらいジェンダーの問題があった。だから、田中さんのところに行っただけで、自話は話が抜群にうまかったしね。でも、「優生保護法阻止」というようなスローガンに対しては、自

分の問題として全面的に関わりきれないわけ。そこには最初から齟齬があった。

リブセンには、一九七四年から二年間、ひんぱんに通って、翻訳グループに入った。『オフ・ワ・バックス (off our backs)』とあった、アメリカから送られてくるニュースレターを整理する係をやったんです。そこでアメリカにはレズビアン・フェミニストという人たちがいると知って、アメリカに行ってみたいなあと思いはじめた。その年の十二月に日本女子大学で、ドテカボ一座のミュージカル^三が行われたんだけど、私は照明係を手伝っていた。そこで、早稲田大学の学生だったキムという人と知り合うんですね。彼女はレズビアンだったんですよ。私はその頃、学生運動の中で知り合った友だちと同じアパートで暮らし始めていたんだけど、キムはそこによく遊びに来て、アメリカのレズビアンバーやコミュニティの話をつっぱいしてくれたの。そうした生の情報をいろいろ教わって、「ぜひアメリカに行こう」とますます思うようになったわけです。

「青い部屋」で働く

アメリカ行きの準備として私がしたことは、まずは英会話。それと、少林寺拳法と空手を習った。アメリカはすごく恐いところというイメージだったので、自己防衛のためにね。ブルース・リーみたいに、顔だけでも強面にしようとか(笑)。それから、このときに、日本のレズビアンを知るためと、アメリカ行きの旅費を稼ぐために、「青い部屋」というレズ・バーで働くことにしたわけ。こういうことが全部一九七四年、二三歳の年に起こっている。若いってすごいよね。

ところが、二、三ヶ月「青い部屋」で働いてみて、自分はずくづく水商売に向いていないということがわかった。客商売って人付き合いの才能でしょう？ カウンターに座るお客さんに愛想

よく接するとか、ちよっとお世辞を言うとか、そういうことができずにげっそりしちやつて。おまけに、タチネコっていうのが露骨な世界なのよ。タチはネクタイに背広を着ていて、まるで男みたいなもの。女装しているゲイの子が一人いて、ドレスを着ている女の人も、まあ二、三人はいたけれども、ほとんどはタチというか、男装をしているわけ。中にはおじさんみたいな人もいた。

私はカウンターで、白いワイシャツと黒いベストを着て、黒い蝶タイをさせられたね。その当時はまだ男女雇用機会均等法がなかったから、女の人は深夜に働けなかった。だから、私も「中山仁」とかいう男の名前をつけられた。面接で、マネージャーから「趣味で働けるんですから、給料は安いですよ」って言われた。「同性愛って、趣味かよ！」って思った。一晩働いても大した金額にならなかった。よく覚えていないけど、深夜労働でも時給八百円とか、そんなものじゃなかったかな。ものすごく安かった。

お店は夜の十一時頃から始まる。お客さんには、女の人が好きで、店の誰かが好きでやって来る人もいるんだけど、だいたいは、普通の飲み屋に飽きた人たちだった。銀座で店が終わったママたちが、男の客を連れて、「ちよっとおもしろいところに行こうよ」「一味違ったところへ行こう」というノリで来る。そういう意味で幻滅もしたよね。「なーんだ、ここは結局、ちよっと奇をてらった変わったものの好きの、金持ちの人たちが飲みに来る場所だったんだ」ってね。カウンターに座って、一杯飲むと五千元。「チャーム」といって、つまらない突き出しが出るんだけど、それとウイスキー一杯で五千元。だから、ちよっと飲めば二万や三万はいった。今の新宿二丁目のバーとはぜんぜん違う。

リーブセンでの活動

私の場合、自分が初めて見たレズビアンというのが、「青い部屋」の人たちだった。リーブ新宿センターでは、誰がレズビアンかはよくわからなかった。少しずつ「あの人もそうだ」ということを人づてに聞くと感じる感じだったし、レズビアンだとわかってても「えー、この人なの」「何か話が通じないよ」という印象だった。

私がリーブセンでいちばん影響を受けたというか、「仲間だな」と感じたのは、宮本さんという人だった。一九七五年にはリーブセンに毎日のように顔を出すようになって、相当入れ込んでいたんだけど、その頃「棚を作るんで、手伝ってくれないか」と頼まれて。私は大工仕事が好きだったからね。それで宮本さんと棚を作るのを手伝ったり、資料整理を手伝ったりして、リーブセンのことが少しずつわかっていくわけね。宮本さんは仲間と焼き物の窯場を持っていたので、よくそこに遊びにも行った。芸術センスのある彼女たちのライフスタイルが好きだったんだと思う。同じ年には、リーブセンの人たちとワークキャンプをする話を持ち上がった。一人一万円ずつ出して、自然農法で野菜を作ろうということで、静岡の実家に頼んで小さな畑を借りた。リーブの人たち二、三人と車で通って、落花生を作ってみただけど、案の定失敗した。若い頃からよく考えもしないで実行に移すことが多い人間でした、わたしは（笑）。

アメリカへ

一九七五年の夏に、パートナーと一緒にアメリカへ行った。当時の日記を読み返すと、「同性愛であることに何か正当性を見出すことがこの旅の動機だ」と大真面目に書いてある。「異性愛社会

で、女の人と愛し合って生きていく」ということに自信がないわけよ。自分では「ただ好きだけなんだ」と言っていたけど、何かもつと根拠がほしかったんだらうね。で、私の場合は、文字を通して勉強するよりも、人に会いに行っただね。

パークレーから始まって、シアトルとかニューヨークとかミネソタとか、いろんなところに行った。三ヶ月ぐらいの旅だったけれど、それで「ああ、私、このような人たちならアイデンティファイできる」という人たちにたくさん会った。それが全員レズビアン・フェミニストだった。彼女たちの何が良かったかというと、ジェンダーから非常に自由だということ。女らしく生きなくてもいいんだということを全身で表していた。その一つはファッションだった。髪が短くて、化粧っ気もなく、Tシャツとジーパン、それでいいじゃんって。でも、そばに寄るとオーデコロンのいい匂いがしたり、イヤリングしたりしていて、それとなくおしやれで、表情が明るくて、本当に正直で健康的な感じ。そういう人たちが多かったんだよね。

「青い部屋」の薄暗い明かりのなかで妖しくうごめく人たち。いつも下ネタしか話さないような人たちとは大違いだった。今になれば、そこには自分のホモフォビアが投影されてたし、彼女たちはお金を稼ぐためにそうしていたんだとわかるけど、当時の私には彼女たちと自分が同じとはとても考えられなかった。だからよけい、アメリカで会った人たちがステキに見えた。「この人たちのようだったら、私も一生このまま生きていけるかも」と思えたんだよね。

彼女たちは、レズビアンが単なる性的な存在じゃないんだということと、男女の役割分担について、すごく厳しく言っていた。それはもう、アメリカのレズビアン・フェミニズムそのもの。私は、ブッチフェムの性役割ということについては、「ベッドの中のことまであれこれ言うのは、

「どうなのかなあ」と思っていたけれど、日常的な家事分担なんかでロールプレイがあるというのは、絶対おかしいと思っていたから同感だった。

それに、彼女たちの暮らしぶりを見ると、これは本当に一つの生き方であって、日本のように、レズビアンをポルノに押し込めて、性的な部分だけが強調されているということは、まるでなかった。だから、彼女たちとの出会いは私にとって、洗礼みたいなものだった。強烈な洗礼。「あ、これで行こう」と、私は即、決めた。

リブセンのなかのレズビアン

アメリカから帰ってきて一年は、卒論を書くのに忙しかったので、アメリカで得たものを形にすることはなかった。(リブの人たちにアピールすることも)ない。私は、そこまで彼女たちに期待してなかったし、深く関わってもいなかったから。

リブセンでは最初からカムアウトしていました。田中さんはびっくりしたような顔をして「パルノを見るような目で見て、ごめんなさい」って話しかけてきた。それから「レズビアンというのはポルノの一つだと思っていた」というようなことを私に言った。まあ、ある意味、正直だね。あの時期のウーマンリブのリーダーであった彼女でさえ、レズビアンに対してポルノというイメージを持っていたのだから。どれだけ当時、レズビアンのイメージが強くポルノと結びついていたかが、よくわかるじゃない。

(リブセンでレズビアン差別は)あったみたいね。でも、私に対してはなかった。なぜかというね、私は運動の内部の人というよりは、外部の人として登場したのよ。その頃、私は「青い

部屋」に行っていたから、ずいぶん派手な格好をしていた。赤のストライプのワイシャツに茶色のベルベットの三つ揃えを着て、髪の毛は当時、流行っていたウルフカット。たぶん田中さんはそんな私を見て、「ぜんぜん違うタイプの人が入ってきた」と感じたんじゃないかと思う。だから「パンダを見るような目でごめんなさい」って言ったんだと思うな。

七〇年代のミニミニ誌

『すばらしい女たち』^四を作った人たちはね、(二二三)ページの「この雑誌を作った女たち」を見ながら)狩戸さん、麻川さん、原田洋子さん、樂白雀さんがリブ。織田道子さん、田部井京子さん、岩井由美さん、本田則子さんが若草の会から。B・L・Bさん、Susan Sapphoさん、Geri Steinさんは外国から(すべてペンネーム)。私は文章は書いていないんだけど、この座談会^五には参加しているの。「あ、これ私の発言だ」というのがいくつもある。

『すばらしい女たち』は、題のつけ方からして、レズビアン・フェミニズムの視点が強く打ち出されているよね。女性性の全面的な肯定というのが、強烈に打ち出されている。それに、レズビアンの「すばらしさ」を見ようと一生懸命だったんだよね。私も、さつき話をしたような「青い部屋」の暗い雰囲気の中で「これしかないのか」「人生これかよ」と思っていたとき、レズビアン・フェミニストに出会って、未来が開かれたような、パーツと明るいモデルに見えた。自身生き方の支柱になっていくという予感があったから、それを何とかして言語化していきたい、という思いはあった。まあ、『すばらしい女たち』という題は、私だったら気恥ずかしくてちよとつけられなかったけどね。

『ザ・ダイク』^六は、『すばらしい女たち』に参加していた、若草の会の出身者たちが作った。リブの人たちとは一線を画しているよね。もちろんリブの考え方は入っているんだけど、それがあまり強くない、リブの人たちみたいに「政治的な選択」で「思想的に」レズビアンになったと言わないで、自分が性的にも同性が好きだからレズビアンだ、と言っていた。私は（文章を）書いた覚えはないんだけど、その準備段階には参加している。

この頃はまだ「思想派」とか「根っから派」という言葉はなかったけど、何か齟齬はあったよね。リブの人は、男女差別に対する意識の薄い人を馬鹿にするようなところがあった。馬鹿にする方便として、「性役割」というのが使われていた。タチネコはロールプレイに対する意識がぜんぜんない、ということだ。

ちよつとボーイッシュだと「タチだ」って言うんだよね。たぶん外見から判断されていたと思う。『ザ・ダイク』のメンバーの中に、身体に障害があつてよく歩けない人がいて、アパートの二階で会議があるときは、彼女をおんぶして行かなきゃならなかったんだけど、おんぶするのは必ず私。それは、ジーパンとTシャツで男っぽい格好をしていたから。あまりにステレオタイプだったよ。「この人はタチ」「この人はネコ」って。活発にいろいろやる人はタチ、消極的だとネコに振り分けられる。それで、タチをやり込めるみたいな、そういうところがあつたんだよね。

『すばらしい女たち』の座談会のなかにもちよつと出てくるんだけど、私は子どもが好きだったから、「自分の好きな人と子どもがほしいと思うんだ」って正直に言ったりすると、すごく批判されるわけ。「血の思想！」と叫んで、雑巾を投げてくるような、ヒステリックな批判をする。出雲まろうさん^七もそのことを覚えていて、「会議のとき、沢部、雑巾投げられたよね。すごかった

よね」って（笑）。そういうことが何回もあった。

各グループに一人ぐらいはいたな、そういうエキセントリックな人。だから、『ザ・ダイク』のなかでもよくけんかをしたよ。私はそういうのが嫌で、嫌になるとやめるから。それで『ひかりぐるま』^八を始めた。これは私とパートナーと、アメリカに留学して社会学をやってきた英語がよくできる人と三人で作ったんだけど、その彼女がやっぱりエキセントリックになっちゃって、これも駄目だというんで、二回発行して、やめたね。

七〇年代のミニコミは、何で続かなかったのかなあ。まあ、自分に関して言えば、完全に力不足。文章を書く力のなさ。書けなかったね、自分が決まっていなかったということもあったし、知識もなかったし。でも、何を知識にするかって言ったって、元になるもの自体が少なかったんだよね。いずれにしろ、当事者でありながら、表現するってことはむずかしいものですよ。『ひかりぐるま』の格調高い文章^九（笑）を書いた人は、フェミニズムの文献を頭でよく吸収できる人で、言葉が巧みでした。

レズビアン・フェミニズムについて

確かにね、レズビアン・フェミニスト・セパレティストに最初に会ったとき、私は違和感をもっている。そう書いてあるの、日記に。すごく理屈攻めで、硬い印象、白人、ピューリタンというイメージって。マリーという人がいて、彼女はものすごく厳格な人だったんだけど、二回目にアメリカに行ったときには、結婚していたんだよね。「へえ？」って驚いたけど、そういう脆弱さがあったよね。それは、理屈だけだからだと思う。

私は、レズビアン・フェミニスト、セパレティストの弱さというのは、からだ全体を通してないからだと思っている。からだを通していい思想は駄目でしょう。からだを通して、痛い目にも楽しい目にもあっているということが、すごく大事だと思うのよね。そういうのがないとすぐへなちよこになる、ということを感じたね。

何かに書いたけど、レズビアン・フェミニストか、フェミニスト・レズビアンかということ、ずいぶん違う。フェミニズムの生き方に共感をもっているレズビアンと、レズビアンに共感するフェミニスト。フェミニストかレズビアンか、どっちが修飾語で、どっちを下に持つてくるかで、ずいぶん違っちゃうよね。でも、頭だけで「レズビアンになる」というのは、ありえないと思うな。フェミニストに対するシンパシーを感じていくなかで、女の人を好きになるということはあるだろうけどね。

「七〇年代後半から八〇年代にかけての出版物が、レズビアン・フェミニズムの影響を受けているか」という質問には、それなくしては何もできなかったとはつきり言える。

私は、レズビアンのポルノのイメージ、隠微な感じがすごく嫌だった。それは、私が「青い部屋」で見たイメージでもあったんだろな。それから、扇ひろ子という歌手が山本浩二という名前のレズビアンの人と一緒に写真を当時、雑誌で見たんだけど、その人はすごく男っぽかった。そういうイメージとか……やっぱ「異常」ということかな。「病気」とまではいかない、異常で、隠微で、とにかく遠ざけたいような、認めたくないもの、気持ち悪いもの。そういったイメージでしか語られない、そういった文脈にしか出てこない「レズ」、自分自身がそれであるということ、ものすごい衝撃。「私はこのまま生きていくのか」「このまま、ずーっと暗いなかで暮らさな

きやいけない」「ずっと裏街道を行かなくちやいけない」と。本当に絶望なんですよ、それは。その絶望から少しでも光を見たいというところに、たとえば『すばらしい女』が出てくるんだと思う。私がアメリカのレズビアン・フェミニストに会って、「ああ、これなら生きていけるかも」というふうに思ったのは、そういう気持ちだった。

だから、レズビアン・フェミニズムの洗礼を受けていなかったら、『ひかりぐるま』もJICCの本（後述）も、とてもじゃないけど作れなかった。そう言うのは私だけかもしれないけど、でも、その個人が運動を起こし、ものを書いてきたわけだから。歴史ってそういうものだと思う。個人なんですよ。個人がそのときに何を感じて、どういうふうに行動したか、それがどういうふうに結果として残ったか、ということだからね。「リッチ」がああ言った、こう言った」というよりも、いろんな人がレズビアン・フェミニズムというものを自分の思想として受け入れて生きてきた。レズビアン・フェミニストの姿に感動して、「自分もそれなら生きられる」と思って、実際に生きてきている。そういうことの集積だよな。

一九七〇年代、レズビアンたちが男たちの楽しみのためのポルノのなかで、男たちにとって神秘的で隠微なもの、覗き見するための対象にされたということは、どうしても嫌、冷静に受け止められなかったんですよ。ものすごい人間疎外なんです。それが嫌だから、そこから離れて、自分たちのライフスタイルを肯定してくれる思想が必要だったの。でも、それが借り物じゃなくて、日本の土壌に合った、自然なことばになるのには時間がかかるんですよ。

「れ組の」まめ」結成（一九八四）

『ひかりぐるま』が駄目になったあとにもけっこういろいろやっていた。一九八〇年に「花ぶぎ」というグループに加わるんですよ。それは、駒尺喜美さんと小西綾さんのもとに集まったりブセンとは違うリブの人たちの集まりで、二人が住んでいた神楽坂五十六番地の家を五十六番館と呼んで集まった。性差別というものを現実の生活のなかに見出していく、という趣旨だった。たとえば、サンリオのキャラクターの女の子と男の子を比べると、ちよつと違う。そこから男と女はどういうふうになぜ作られているかを観察して、言語化したりした。纏足の歴史も調べた。

私はそのころ教員の仕事をしていただけでも、学校のなかの性差別的な言動を書き留めたり、生徒にアンケートをとったりして、それを発表している。（年譜を見ながら）一九八〇年一月から毎回ミーティングに出席して、十月末から十一月の初めにかけての「女の展覧会」というのを目指して活動している。この期間はレズビアン運動からは遠のいていたけど、勉強はしたね。

それが一九八四年の暮れに復活して「れ組のまめ」を結成したのは、若林（苗子）さんのほうから「スライドを作りたい」と声がかかって二、それに応じて私も「何か（媒体を）作らないか」と呼びかけたからです（一九八五年五月「れ組のまめ」発行の『れ組通信』創刊）。一つには、ボーナスでワープロを買って、文章がすごく書きやすくなって、執筆意欲が高まっていた。ワープロの登場は大きかった。それから、その翌年に映画『アナザウェイ』三を観て、主人公のエヴァにすっかり共感してしまっただけで、爆発的に文章を書くようになった。彼女は私が生まれて初めて同一視できた映画の主人公だった。同一視は尊敬の感情がともなわれないとできないんだよね。エディタースクールに通って、文章の書き方を勉強するようになったのが一九八五年です。

七〇年代と八〇年代の違い

七〇年代のミニコミ誌は、一応、模索舎^二なんかに置いたけど、限られた人しか手にとつてないだろうね。七〇年代は、人がぼつん、ぼつんとしかいなかったけど、八〇年代は少し増えてきたかな、っていう感じがあったね。七〇年代は「あ、彼女、若草の会からきたのね」とか「リブセンから来たのね」「この人は外国人で」というふうには、出所（でどころ）が限られていたかんじなんだけれども、八〇年代になってくると人口が増えるというか。八〇年代は外国人がたくさんいたし、英語ができる人は、運動にはそれほど熱心でなくても、海外からの情報が早いからけっこう楽しそうにやっていた。

『れ組通信』を出した頃から、地方の人とも連絡がとれるようになった。「れ組スタジオ・東京」（一九八七年三月創設）という名前は、東京以外に、九州とか北海道とか、地方にも広がるというイメージでつけた。七〇年代は、少しずつ顔見知りができて「ああ、一人じゃないんだな」ということがわかっていく、という雰囲気だったけど、やっぱり八〇年代になって広がったという感じはあった。

とくに私としては、一九八六年にジュネーブのレズビアン会議に行つて、そのレポートを『婦人公論』に書いた^四のが大きかった。私書箱を設けて、連絡先を載せておいたら、百通ぐらい手紙が来たの。その百通の手紙がきっかけになって、JICCの本『女を愛する女性たちの物語』につながっていく。マスメディアだったということも大きいとは思いますが、それだけみんなが反応してきて、社会的な機運が高まっていると感じた。それにやっぱり時代にお金があったんだね。JICCの本を作ったときは、取材費も出たし、原稿料も出たし、少しだけ印税も出た。

だから、今考えれば、金銭的には本当に恵まれた時代だったんだな、と思う。

『女を愛する女たちの物語』の発行（一九八七年四月）

一九八六年の春に勤めていた学校を辞めました。学校というのは、時間的な拘束がきつくて、何もできないでしょう。「何とかならないかなあ」とずっと思っていたんだけど、その頃いくつかのきっかけが重なってね。一つは、一九八六年の二月にダイク・ウィークエンドで嵐山に行ったときに、原さんから Marilyn Frye の『The politics of reality』という本を翻訳しないかと誘われて、読み出したこと。アメリカのレズビアン・フェミニズムのいいエッセンスが入った、哲学的な本だったの。原さんを中心として何人かで読み進めて、すごく難しかったけど、読み応えがあった。それから、やはりその二月に若林さんから電話があって、三月末の国際レズビアン会議に行かないかと声をかけられたんですね。彼女には招待状があったんだけど、私にはなくて、自分で旅費を払わなきゃならなかったけど、行ってみたいと思った。

あとは、その半年ぐらい前からルポルタージュの書き方の勉強を始めていて、「もつとちゃんと文章を書けるようになりたい」と思っていたこともあった。まあいろいろな要素が重なって、「学校をやめて自由にやりたい」「ライターで食べていけるようになりたい」と強く思うようになった。それで、三月の半ばについて校長に辞表を出して、ジュネーブに飛んだんですよ。その帰りに『アナザウエイ』に出演していた女優のヤドヴィガ・ヤンコフスカ・チェースラックにポーランドまで会いに行ったりね（笑）。

それで帰ってきてから『婦人公論』六月号（一九八六年）に、レズビアン会議のレポートを載

せたんですよ。そこに「感想を送って下さい」ということで私書箱の連絡先を載せておいたら、全国から百通ぐらい手紙が来た。「こんなことが世界であるのかと思うと嬉しかった」とか「自分は地方で暮らしていて本当に孤独だけど、東京のほうでぜひがんばってほしい」「女の人が好きだという人と会ったこともなかった」「自分は女性が好きだったけど結婚してしまった」とかね。まあなかには冷やかしてみたいな人もいたけど、ほとんどが真面目な手紙だったんです。それで「ああ、みんなこんなに声を上げている」「こういう人たちの声を届けたい」「本を出したいなあ」というふうに思ったんですよ。

私はその頃、友達の紹介で編集プロダクションに入って、芸能リポーターのデータマンの仕事をしていたんですよ。インタビュをして、それを起こして、アンカーのところを送るという仕事。インタビュとテープ起こしの練習をかねてやっていたんだけど、それがおもしろくない。それで、もらった手紙の返事を書いたり、手紙をくれた人たちに会ったりしていた。あとは、大宅壮一文庫に通って同性心中事件を調べたり、自分なりにアンケートを作ったりね。本を出せる目処はつかなかったんだけど、そうしているうちに、自分がものを書いていくことの意味とか、自分が何をやりたいかとか、どんどんなはつきりしていった。

そうこうするうちに、久田恵さんというライターの方から連絡が来て、出版社への道を開いてくれたんですよ。彼女が『女のネットワーキング』^{一五}という本を作ったときに、「れ組のごまめ」にもアンケートが来たので、私の書いた「主体的に生きるレズビアン」という文章を送ったんですよ。そうしたら久田さんが関心をもったみたいで、取材の申し込みが来たの。池袋にフェミメイト舎という彼女の小さな事務所があって、私がそこを訪ねたのが六月二七日（一九八六年）

だった。いろいろと話をしていくなかで「レズビアンの本をぜひ作りたいと思っているんです」と言ったら、彼女が「ぜひ作っただけいい。私が出版社を紹介してあげる」と言ってくれたわけ。私は飛び上がるほど嬉しかったんだけど、一週間ぐらいして「やっぱりちょっと難しい」と言われた。そのときはもうがっくり来ちゃった。でもそれから久田さんがJICC出版局に掛け合ってくれて、ムックだったら出せるということになったのが十月。だから六月末から約三ヶ月はペンディング状態だったんだけど、私はなぜかそのとき「これはJICCじゃなくても、絶対にどこかで出すことになるから」と思って、アンケートは進めていたし、取材のようなこともちよこちよこやっていたんですね。

正式に決まったのは十月九日だった。JICC出版局の編集長の石井さんという人と、私を担当してくれた金箱さんという編集者と会って、「ぜひやってください」ということになった。取材費もちゃんととってくれてね。ただ、編集部の方から「運動の一環にはしないでほしい」「運動をしている人が全部を分担するというのはやめてほしい」という条件は出された。「売れないから」って。「運動に関わっている人が書いた場合でも、ある程度の水準の文章でないと載せられない」というようなことも言われたね。

最初私は、タチネコにとらわれたレズビアン像が入ってくるのはどうかな、と思っていた。それから、レズビアンがポルノチックに扱われるのが嫌で、ちゃんと市民として生きているレズビアンが存在しているのを伝えたかったの。しかも、自分なりに納得のいくライフスタイルを創造して、モデルとして伝えていく、ということをしたかったと思うのね。でも一方で、私はルポルタージュをやるわけだから、プロパガンダを押し出してもしょうがないという気持ちもあってね。

まあ「ありのままの自分たち」というのをとらえて、それを形にしていくのがいいな、というふうに思うようになった。その方針は編集部とも合致して、「こういうことを書きたい」と私がリストアップしていったもののほとんどが、この本で実現した。ただ、なかにはやっぱりプロパガンダみたいな内容のものを書く人もいて、編集部がどうしても通さなくて、書いてもらったけどボツになった原稿もあった。

（目次を見ながら）「„地の果ての国、で恋におちて”の岸黎子さんは、れ組スタジオ設立のメンバーですね。「夕チ この孤独な生き物」の水川さんは確かAさんだと思うのね。「新千一夜物語」もAさんでしょ。山内美穂さんというのは、私は会ったことがないの。「初恋の日々」は私です。私は名前を変えて何本も書いています。「二人の名前で書きすぎると、その人の色がつくから」と言われたので。草間けいというのは、当時の私のパートナー。小倉祐子も私。松本エムさんはれ組のメンバーですね。

「セックス大放談」というのは、確かいちばん最後に入ってきた企画で、編集部から「入れてくれ」って言うてきたんですよ。三人で座談会をしたものなんだけど、一人は私、もう一人は「マーズ・バー」^{一六}のマー。もう一人はねえ、ちよつと思ひ出せない。でもこれは、「れ組スタジオ」の人たちからずいぶん批判された。セックスのことを話すこと自体が許せないという人がいてね、わたしはなんどか思っていました。那波かおりさんというのはルポライター。「若草の会」は私が書いて、久田さんが「れ組のごまめ」のレポートをしてくれて、「欧米レズビアン情勢」は原さんでしょ。執筆者にはれ組のメンバーがかなり入っているんだけど、ごりごりのレズビアン・フェミニストは書いても通らないという現実があった。

第二部の「二三四人のアンケート」は、まず『婦人公論』の文章に手紙を送ってくれた人たちに協力をお願いした。それから『れ組通信』の購読者、ウィークエンドで会った人たち。地方で当時から集まりをもっていた人たちもいて、その人たちに配ってもらったりもした。

アンケート用紙は、B5の大きさの紙に十枚ぐらいいはあったんですよ。それでもみんなの書いてくれること、書いてくれること。すごかったですよ。記述式のところがあるでしょう。そこもみんなびっちり書いてくれて。紙の表だけじゃ足りないから裏にも書いてある。別の紙をはさんで書いてきてくれる人もたくさんいた。「みんな、本当に伝えたいんだなあ」ということをすごく感じた。私がいちばん載せたかったのは、このアンケートです。

この本でいちばん困ったのは、写真と挿絵でしたね。自分の顔を出してくれる人がいないですよ。私もまだそんな勇気なかったしね。ただマーだけは出てるでしょ。マーはもう腹を決めて、バーを始めていたんだよね、偉いよね。とにかく写真がなくて。編集の金箱さんもってきてくれる写真や絵は、すごく暗いんですよ。あやしいかんじのものとか、ちよつと不良っぽい女の子とか。「えー、やっぱりレズビアンってこういうイメージかあ」とがっかりしましたね。できるだけマイナスイメージをもたせたくなかったから、明るいイメージのものがほしいと思うんですけど、どうしてもないんですよ。そういうのを集めてきてくれないし、探してもあまりないんですよ。でも、草間さんの文章の挿絵はいい絵だなと思った。桜沢エリカ^七さんが描いてくれたイラストね。

この表紙の写真は、最初、泣いている女の人の写真だったの。それで「金箱さん、なんで泣いている写真なんですか。私は強い意志の目をした人の写真を載せたい」と言ったの。そうしたら

金箱さんがこの写真を探してきてくれた。「ああ、これはいい。これにしよう」ということになった。でも本が出てから、昔の教え子から「私の写真を使っただろう」「すごく似ているって友達がいんな言う」と言われて、びっくりした。彼女もレズビアンで、私にカミングアウトしていた子でね。言われてみれば似ているけど、「そこまで怖いのか」と思ってね。心がさむざむとした覚えがある。

この本は「一九八七年五月二五日発行」になっているけど、実際に出たのは四月の末でしたね。三月の初め頃には入稿していたから、約半年で仕上げた。これだけのものを半年であげるって、かなりの短期間ですよ。ワープロという機械がなかったら、ちよつと不可能だったよね。

一九八七年三月に「れ組スタジオ・東京」がオーブンしていて、この本に連絡先を載せておいたことで、ずいぶん人が集まったんです。新しい人がいっぱい来て、大学の先生をしている人とか、学生とか、編集者とか、今までとは違う層がかなり入ってきた。そういう人たちと「発想を変える会」という会を作って、『The Politics of Reality』の翻訳を続けたりしていたんだけど、この本自体はコミュニティではあまり喜ばれなかったし、評価もされなくて、なんかがつくりきたんですよ。私としては、「れ組のぐまめ」や『れ組通信』を自分なりに一生懸命つくって、JICCの本もそれを母胎にして出したつもりでいたんだけどね。

それと八〇年代後半って、上野千鶴子さんとか小倉千加子さんとか学者フェミニニストが活躍するようになって、フェミニズムが強くなった時期でね。私の友達は学者が多かったんだけど、みんな生き生きしていたよね。私はやっぱりノリがリブなのよ。でも、友達はフェミニズムに鞍替えして、みんなずいぶんスマートなことを言うようになった。「フーコーは同性愛者なんて

存在しない、って言ってるんだよ」とか言うじゃない(笑)。JICC本に対しても「いつまでそんなこと言ってるの」という調子なわけ。当時フェミニストは時代の先端をいく思想家といった雰囲気だったな。でもこっちはもたついていてカッコ悪いし、ぎりぎりのところで命張ってがんばりましたけど、ぜんぜん評価もされません、どうしたものでしょう、ってかんじよね。コミュニティとフェミニズムの板挟みだったよね。

『瓢騎ライフ』の発行(一九八八年五月)

そんな頃に『新地平』に発表した文章^{一八}が問題になって、れスタですごく批判されてしまった。『新地平』は商業誌でマスコミだし、「沢部さんがマスコミに書く以上は、れスタを辞めてほしい」とはつきり言われた。『新地平』は労働関係の機関誌みたいな地味な雑誌で、原稿料もわたしはもらってない。確かにれスタに関係あった人の話に触れたんだけど、匿名でその人が特定できるような情報は一切省いて、ホモフォビアの実態というのはこういうものだ、ということを書いた。私自身もひどいホモフォビアを受けて傷ついた経験だったから、表現したことについてあんな批判を受けるいわれはないと思ったから、そう言ったけど。難しい問題だと思う。

私は、自分たちの問題や自分たちの本当の姿を外に出して、自分たちを可視化したい、自分たちのイメージを変えていきたい、という目的で表現活動を始めた。JICC本もそのつもりで出したし、一つの働きをしたと思うっていったんだけど、そのところが当時のれスタのメンバーにはすんなり受け入れられなかった。私としては、ちよつとおこがましい言い方だけど、自分たちが置かれている社会的な状況を外に発信することを、使命みたいに感じていた。だけど、れスタで

そのコンセンサスは得られなかったんだよね。

ちよつと早すぎたのかもしれないね。みんな、怖くなっちゃったんだと思う。まだ、外に出て行く心の準備もないし、私は突っ走ってしまうタイプとして受けとられたんだらうね。「あの人のそばにいと危険」というような雰囲気で、「マスコミのスパイ」という言葉まで投げつけられた。

私は「マスコミにみんなを売るなんて、ありえない」と言っただけで、みんなあまりに硬化してしまつて、結局、れスタを辞めることになった（一九八七年十月頃）。メンバーの一人の意見で、ガリと集団の私に対する目が変わる。あれは怖いね。私の運動嫌いはあそこから始まつています。

今だつてそういうことはあるでしょう。マイノリティのグループの問題を外に発信していくことに対して、マイノリティ自身が足を引つ張るといふ。それぞれ苛酷な現実を生きているからかな、けつこう疑り深い人も多い。「そんなことはしないほうがいいよ。寝た子を起こすから」という人もいる。でも、マイノリティがどうやってこの社会で生き延びていくか、という問題つて、はつきり人権問題なんだよね。同性愛は病気じゃないんだし、一人の人間として誰に遠慮することなく生きていけるわけよ。マイノリティ自身が心底そう思えるようになっていかないと始まらないよね。

でも、この事件でその頃の私は気をそがれたの、外へ発信していくことに。ま、自分自身も弱かつたんだと思う。でも、自分が考えていること、自分のなかに育ってくるものをちゃんと書きたい、という気持ちは強かつた。書くことでしか考えられないタイプだから。だから「何か媒体を作らなきゃ」と思つて『瓢駒ライフ』を作つたのね（一九八八年五月創刊）。

創刊号の松本泉さんという人の文芸批評はなかなかいいよね。はたなかさんは漫画を描いて。

松本さんとはたなかさんがカップルで、沢部と草間もカップル。二組のカップルで始めたのね。Marilyn Fryeを高瀬まゆみさんが翻訳しているけど、彼女は非常に優秀な学者なのよ。今読んでも、かなり程度の高い翻訳です。まあ、よくがんばって作ったなと思う。ただ、私は当時、湯浅芳子さんの取材をしていて、『百合子、ダスヴィダーニヤ』^{一九}が出る頃には忙しくて続けられなくなっちゃった。だから、六号（一九九〇年六月）は松本さんたちが作ったの。七号（一九九二年九月、最終号）もそう。悪いことをしちゃったんだけど、その頃、パートナーと別れることになって、何もやれなくなっちゃったのね。

湯浅さんの本が出たときは、まだパートナーと一緒に住んでいて、すごく喜んでもらった。その翌年だったかな、別れたの。四十歳になる年だった。三十代後半って、いろいろな問題が出てくるんだよね。彼女と別れたのは、子どもの問題があったのよ。湯浅さんの本を書いていたとき、相方がずっと「子どもが欲しい」と言っていた。でも私は二人で子どもを育てることにためらいがあった。正直言うと、湯浅さんの本に集中していた四年間、私は一人ですごく充実した時間を過ごしていたんだよね。相方が仕事に行ったあと、本を読んだり、一人でパソコンに向かって文章を書いたりしているのが面白かった。そういう喜びの前に、子どもを育てる人生を選べなかった。それに、表現って孤独がつきものみたいなどころがあるしね。今になれば、結局、孤独の道を選んだんだよね。それでも当時は一人になることをものすごく恐れていたし、実際に一人になったら慣れるものすごく時間がかかっちゃったけど。

私は、二十代の後半に彼女に会って、それまでの人生をリセットしたところがあったのね。「人生やり直し」って。それから十年びったり寄り添って生きてきたから、別れた後の喪失感から長

いこと立ち直れなくてね。運動からはじき出され、恋人からも拒絶され、それで活動から一切、手を引いたんだよね。深いアイデンティティ・クライシスに陥った。それに、湯浅さんの本を四年間かけて仕上げたから、三十代までに自分のやる事が終わったのかもね。それでふぬけになったんだと思う。

パフナイトとパフスクール

九〇年に湯浅さんの本が出て、一九九二年には『評論なんかこわくない』^{二〇}が出た。予備校で現代文を教えていたし、私、言葉が好きだから、試しに文体論をやってみようと思って、おもしろがってやったんだよね。あれは、スーッと書いて、一年ぐらいであげちゃったんじゃないかな。本って、自分の、特にセクシュアリティがからまないとこんなに簡単に書けちゃうんだと思った。

それが終わった後、大学院に行ったんです。自分で文体論をもっと専門的にやったほうがいいんじゃないだろうかと思ひ始めてね。友達はフェミニズムのほうに行つて、バリバリやってるし、「自分ももうちょっと学をつけたほうがいいのかしら」とか、「文章を書いていくうえで専門性がないのは弱いなあ」とか、いろいろ思つてね。受験勉強をして、一九九四年に大学院に入って、博士まで行つたけど、「専門性ってこういうものなんだ」とか「ゼミってこういうふうにやってるんだ」といったことがわかっただけ。研究に集中するのも遊びの一つには違いないけど、今思えば、あのお金と時間でもっと楽しいことをしたほうがよかった(笑)。大学院を出た頃から、一九九八年だったと思うんだけど、友達の紹介で『アエラ』の「現代の肖像」に書くようになって、「ああ、こういうほうがやっぱり自分らしいなあ」って実感しました。

その間、コミュニティの情報はぜんぜん入れてなかった。ミニコミ誌もとらなかつたし。出雲さんがよく電話をくれて「こういうイベントがあるから出ないか」って誘ってくれたけど、あとはずせんせん。でも、二〇〇四年にパフナイト^三に関わりだしたきっかけはねえ……、タリーさん^三に会ったからかなあ。えーと、知り合いに誘われて、タリーさんのパフォーマンスを観たんだなあ。『自画像』という、カミングアウトをするパフォーマンスを観た。それからしばらくして、タリーさんはパフスペース^三を始めたんだよね。で、パフに集まる若い子たちがやっていた英語の会、レズビアン・フェミニズムの本を読む会に誘われて、その子たちとだんだん親しくなつて。それで引きずり込まれるようにパフナイトに入つていった。

最初のうちはすごく楽しかった。みんな若いし、昔のことをぐずぐず言わないし。それにイデオロギーとかぜんぜん言わない。七〇年代、八〇年代の初め頃のリブの連中のなかにはいばる人がいたからね。何か横柄なところが感じられて嫌だったんだけど、若い子はそういうのがぜんぜんないわけ。本当に、馬鹿がつくくらいに素直でさ、おもしろい。よく笑つたよね。楽しいからやつてたんだよね。後半はちよつとぐずぐずしたけど、それでも四十回以上やつたからいいんじゃないかと。もう十分やつたし、堪能しました。いい四年間だったよね。パフナイトからは抜けるけど、そのかわりにパフスクール^{二四}が始まった。新しいスタッフも来てくれたし、これも楽しんでながらつづけていきたい。

何よりもうれしいのは、パフナイトとパフスクールで人が大勢あつまつて、パフスペースがコミュニティの活動拠点になつたことです。タリーさんのあと、このパフスペースの経営を浜田幹子^{二五}さんが引き受けてくれたことが本当にありがたかつた。結局、コミュニティって「場」だけ

ら。やりたいことが安心して自由にできる「場」があることで、世の中の色々な人たちの顔が見えて、昔みたいに緊張せずにつながっていけるようになってきた。このことはすごく大きい。仕事は人物ノンフィクションをこれからもつづけていきます。越路吹雪と岩谷時子といったビッグな女たちの物語の他に、そのままにしておくともなかつたことにされてしまう女を愛する女たちの人生やコミュニティの歴史も書き残していきたいと思っています。

一 リブ新宿センター。ウーマンリブの運動拠点として一九七二年に開設（一九七七）。

二 「若草の会」は日本初とされるレズビアン・サークルである。一九七二年に東京で発足した。鈴木道子（仮名）はその会長である。

三 一九七四年から一九七五年にかけて、リブ新宿センターのメンバーを中心に結成された「ドテカボ一座」が「ミューズカル 女の解放」の公演を行った。

四 一九七六年十一月に発行されたレズビアンのためのミニコミ誌。正式なタイトルは『レスビアンの女たちから全ての女たちにおくる雑誌 すばらしい女たち』。「すばらしい女たち」編集グループ発行。

五 『すばらしい女たち』六・三二ページに収録。「一九七六年四月十七日（土）、リブ新宿センター、出席者十七名、全員、同性愛者または両性愛者」とある（六ページ）。

六 『ザ・ダイク』はレズビアン・サークル「まいにち大工」の機関誌である。第一号は一九七八年一月、第二号は一九七八年六月に発行。

七 フリーライター。著書に『まな板のうえの恋』宝島社、一九九三年など。

八 『ひかりぐるま』の創刊号は一九七八年四月五日、第二号は一九七八年九月一日に発行。

九 格調高い文章とは、「二つのひかりぐるま」という筆名による「レズビアン宣言」80（拡散から収束へ）（創刊号）、「凸凹をこえて…性役割の罨」（第二号）のこと。

- 一〇 Rich, Adrienne (一九一九) のこと。アメリカの詩人。レズビアン・フェミニズムの評論として、「レズビアン連続体」の概念を示した“Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence.” *Blood, Bread, and Poetry: Selected Prose 1978-1985*, 1980, New York: W.W. Norton & Company がよく知られている。
- 一一 このとき作成されたスライドの内容については、第四章に詳しく。
- 一二 ハンガリー映画 (一九八二)。新聞記者として働く女性エヴァと、同僚の女性リヴィアとの親密な関係が描かれた社会派映画。
- 一三 シニコミ、少流通出版物取扱書店。東京新宿区。
- 一四 広沢有美 (一九八六) 「世界レズビアン会議に参加して」『婦人公論』一九八六年六月号、四二〇-四二七
- 一五 久田恵編著 (一九八七) 『女のネットワーキングー女のグループ全国ガイド』学陽書房。
- 一六 マーヴ・バーは、新宿二丁目にあるレディス・バー。一九八五年開店。
- 一七 少女漫画家。一九六三年生。
- 一八 広沢有美 (一九八七) 「異性愛強制というファシズム」『新地平』一九八七年六月、三四-三九
- 一九 沢部仁美 (一九九〇) 『百合子、ダスヴィダーニャー湯浅芳子の青春』文藝春秋。一九九六年、学陽書房女性文庫版では沢部ひとみ。
- 二〇 沢部ひとみ (一九九二) 『評論なんかこわくない』飛鳥新社
- 二一 二〇〇三年より PAF SPACE にて月一回のペースで開催されているレズビアン・バイセクシュアル女性のためのイベント。 <http://www.patnight.com/top.html>
- 二二 パフォーマンス・アーティスト。二〇〇三年に PAF SPACE を開設。 <http://fototari.com/>
- 二三 「パフォーマンスアート (アート) とフェミニズムが交差する空間」の意。二〇〇三年開設。早稲田にあり、主にセクシュアル・マイノリティのための活動に利用されている。 <http://www.pafspace.com/>
- 二四 ジェンダー、セクシュアリティ、マイノリティの視点に立ち、生きる知恵と勇気を共有し、学び合う場として、二〇〇七年六月に誕生。 <http://pafschool.blog118.fc2.com/>
- 二五 一九五二年生。「大企業寄りのお役所仕事でなく、今、困っている人のために働いて、自分の好きな人生を送りたい」と、三十年間つとめた経済産業省を早期リタイアしたフェミニスト。夫とともにパフスペースの管理・運営を一手に引き受けてくれた。

聞き手・まとめ・脚注 杉浦郁子

一回目インタビュー 二〇〇七年十月十一日 沢部さん宅にて (都内)
二回目インタビュー 二〇〇八年三月二十四日 都内某所